

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 タム ワイロック

本論文は、日本語における「二人」・「三つ」などの数量表現の意味を、包括的かつ形式的に厳密に記述することを目指したものである。「二人の学生が来た」のように、数量表現が名詞を左側から修飾している名詞句内数量詞構文と、「学生がゆうべ二人来た」のように、数量詞が名詞から切り離されている、いわゆる浮遊数量詞構文の双方において、数量表現が表しうる意味を、それらの表現の作用域および分配性に基づいて分類し、従来提案されてきた諸理論を援用しつつも、新たな分析を行っている。

本論文は、次の二点において学問的に意義のある貢献となっている。

まず、第一に、名詞句内数量詞構文の表しうる意味に関して、Head-Driven Phrase Structure Grammar (主辞駆動句構造文法) および Underspecified Discourse Representation Theory (不完全指定談話表示理論) を用いて、従来の理論より心理学的妥当性が高いと思われる理論を提案している。「二人の学生が三冊の本を読んだ」というような文は、「二人の学生が、それぞれ三冊ずつの本 (つまり全部で最高六冊の本) を読んだ」という場面を描くのにも使えるし、「二人の学生および三冊の本が存在し、それら二人の学生のいずれもがそれら三冊の本のうちのいずれかを読んだし、逆に、それら三冊の本のうちのいずれもがそれら二人の学生のうちの誰かによって読まれた」、という場面を描くのにも使える、ということが観察される。このタイプの構文の意味を包括的に捉えようとする理論としては、Fred Landman の理論があり、従来から存在する理論の中では最も妥当性の高いものであると考えられるが、Landman の理論は、この「二人の学生が三冊の本を読んだ」のような文には少なくとも九つの意味がある、ということ予測し、かつ、この文を聞いた人の頭の中では必ずそれら九つの意味の中のいずれかが即時に選ばれるはずだということ予測するもので、特に後者の予測は心理学的妥当性に欠けるものである。このタイプの文の意味を人が理解しようとする場合、文の表しうる意味のうちの一つが必ずすぐに選び出されるわけではない、ということが心理学的実験によって既に示されているからである。本論文において、タム氏は、主辞駆動句構造文法・不完全指定談話表示理論を利用した分析を構築することによって、Landman の理論のこの問題点を少なくとも部分的に解決する理論を提示することに成功している。

第二に、本論文は、日本語の浮遊数量詞構文の表す意味に課せられる制約を従来の理論以上に正確に捉える新たな理論を提示している。浮遊数量詞構文は次のような意味で分配的にしか解釈されえないということが知られている。名詞句内数量詞構文の「三人の学生がピアノを持ち上げた」は、「学生三人のうちの一人一人がピアノを持ち上げた」という分配的な解釈と、「学生三人が力を合わせてピアノを持ち上げた」という集合的な解釈の両方があるのに対し、

浮遊数量詞構文の「学生がゆうべ三人ピアノを持ち上げた」という文は、「学生三人のうち一人一人がピアノを持ち上げた」という分配的な解釈しかなく、「学生三人が力を合わせてピアノを持ち上げた」という集合的な意味は表しえない。この観察に関して、郡司、橋田、中西といった人たちが理論的な説明を試みているが、彼らの主張によると、浮遊数量詞構文が分配的な意味しか持たないのは、この構文においては、名詞句のあらゆる「もの」の持つ構造と、文全体のあらゆるイベントの持つ構造との間に同型性が存在することが求められているからである。先の文例に即して言うと、一人ひとりの学生が、三人の学生からなるグループの部分であるのと全く同様に、「一人の学生がピアノを持ち上げる」というイベントは、「学生三人のうち一人一人がピアノを持ち上げる」というイベントの一部分を成している、と考えられる。一方、「一人の学生がピアノを持ち上げる」というイベントは、「学生三人が力を合わせてピアノを持ち上げる」というイベントの一部分を成しているとは言えない。このコントラストが、郡司、橋田、中西によると、浮遊数量詞構文が集合的な解釈を持たない理由である。中西氏は、さらに、この理論によって、浮遊数量詞構文には恒常的状态を表す述語を用いにくいことなども説明できると論じている。この従来の理論に対して、タムワイロック氏は、イベントの構造に言及せず、浮遊数量詞構文は分配的にしか解釈できないということを直接に述べる理論の方が妥当性が高いということを主張している。その根拠として、恒常的状态を表す述語であっても浮遊数量詞構文に用いることが可能なケースを取り上げ、本論文で提示されている理論の方がそのようなケースを自然に説明できるということを示している。

審査の場で、本論文には説明が不足していて読みづらい箇所があること、論じるべきであるのに論じられていない点も若干残っていることなどの問題点が指摘された。しかし、そのような問題点があるとしても、本論文は、理論言語学において広く論じられている重要な問題に関して、新たな観察を提示し、従来の理論よりも包括的な理論を構築したものと認められる。

よって、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。